研究員の任期を終えて

瀧　章次

2 年間キリスト教研究所でお世話になり心より感謝申し上げます。この 2 年、偶然、教会で募集が目に止まったとはいえ、「キリスト教とヘレニズム思潮」というプロジェクトに参加させて戴き、静かな研究施設を自由に使いながら、今まで足を踏み入れなかった領域に、自己流ながら踏み込んでみたことは、実りの多いものでした。文学研究において、コンピューターの能力を生かして、いまなお人間に与えられて

いる課題に取り組む手掛かりを得、更に、「内容」を理解することに比べて一段低く軽んぜられる「文体」を論ずることの可能性について、まだ考えてみるべきことも、試みてみるべきことも残されているということを自分なりに掴むことが出来ました。今年の一月に発行された『紀要』に寄稿した論文では、最後まで正体が掴めぬまま脚注に課題として留めておいたことに一区切りつけることを現在進めています。コンピューターを古典テキストの解釈に結びつけることなど思いもつかなかった時代に、出所は忘れましたが、キケロの et を数えて、D.Litt. に引っ掛けて Little Doctor になる輩と古典学者を揶揄する面白譚を読み、その当時はそんな見たところつまらない、一生かかっても終わりそうもないことに労力をかけて、それが学問だろうかという感想を覚えましたが，今は何とこともあろうに、自分が古典ギリシャ語の te を数えている始末です。et 同様、「そして」とか「かつ」という等位接続詞で、正に無内容です。大方この 2 年間私の仕事が周囲に与えた印象もそんなところにあろうかと存じますが、なんとこうしたことばを数え、どの作品のどの箇所にでてくるか出典を示し、作品ごとに何回出てくるか示し、それを全体の語数あたりの頻度で表しグラフで視覚的に表すということも、当然のことながら、内容を読まずにひたすら数え、文脈を無差別に均一化し、数値化し、図式化するコンピューターにとっては朝飯前な訳です。人の力に比べ、コンピューターの量的な飛躍には単純に驚かされますが、以前も今も、もちろん文献学的な事実を解釈することが課題だということに変りはありません。進行中の課題というのも、一見無内容な言葉 te を、先ずつなぎ言葉を必ず要求する古典ギリシャ語における散文の様式として比較し特徴付け、更に、この言葉を、物語を語り進めていく為に語り手が用いる、「すると何某は斯く斯く云々した」という言い回しの「すると」などにあたる道具立ての一つというところから見直すと、どうも「伝記物語」、「歴史物語」という伝統において、マルコとルカとでは、またルカと使徒言行録では、道具立てが異なっているという事実が見えて来るということです。勿論この論争は 20 世紀前半に始まりその後の論争などで、福音書記者ルカは、文体を変えたとか、読まれる社会的文脈の違いを考慮したとか、資料や人物描写ごとに文体を変えたとか論ずる形で、ルカ福音書記者と使徒言行録記者との同一説は、内的外的証拠にも支えられて動かぬように考えられてきましたが、コンピューターの力を借りて総浚いすれば、揺らぐようにも見えてきます。この一年は、協力研究員という場で、この問題を前論文の補遺補訂としてもう少し明るくしたいと思っています。

（たき　あきつぐ

元キリスト教研究所研究員）